Concierge Doctorに憧れて

会員　中村 信太朗（75期）

2014年8月23日、米国ロサンゼルスのDr. Jeremyのクリニックを当時医学部5年生であった私は訪れていた。米国で2010年頃から広がり始めたConcierge Medicineに出会った瞬間だった。Concierge Medicineとは、顧問弁護士のように医師と患者が1対1で契約をして1コマ30分から60分という診療枠を用意し、十分な時間を確保した上で患者の話に耳を傾け、出来る限り説明や相談に時間を割くスタイルの診療を提供する会員制医療サービスである。また、患者は、Concierge Doctorと呼ばれる医師と24時間365日直接コンタクトを取ることができ、医師は大病院受診時や緊急時には患者の代理意思決定者あるいは意思決定支援者として患者に同行し、患者をサポートする。検査・診断・治療の実施主体となる医療機関の医師とは異なる存在である。

とても古典的な診療スタイルではあるが、じっくり時間をかけて患者に向き合うConcierge Doctorは、私自身が幼い頃にイメージしていた医師の理想像そのものであった。感銘を受けた私は、日本でもConcierge Medicineを提供できないかと考えた。もっとも、公的医療が充実している日本では受け入れられないのではないかと尋ねたところ、Dr. Jeremyは否定し、続けてこのように仰った。

「目標を設定して、諦めずに掲げ続ければ、必ず到達できる」

ロサンゼルスでトップ10に選ばれるConcierge Doctorが言うことならば間違いないと当時の私は勇気付けられた。

日本においても、公的医療に加えて、Concierge Medicineのような私的医療や新たなヘルスケアサービスも選択肢に加われば、より良い医療が実現できるのではないか。少なくとも自分や自分の家族であれば、Dr. Jeremyのような医師を望むのではないか。日本に戻った後、卒業を間近に控えながらも私は考えていた。ただ、途方もない話で、私自身どのように実現できるのか分からず、周囲に必ずしも受け入れられる意見でもなかった。

京都大学医学部附属病院初期診療・救急科の集合写真。
最前列左側から2番目が著者。

そのような中で、卒業後の臨床研修先を決めるために訪れていた京都大学で偶然出会った指導医にそれは面白い考えだ！と私の意見を肯定してもらえることがあった。この出来事を契機に多様性と自由を尊重する京都大学の文化に魅力を感じ、それまで生まれ育ってきた静岡の外に出ることを決意した。京都での2年間は臨床医としての心構えや基本的な技術を学び、多くの仲間に出会い、充実した時間であった。他方で、臨床現場では、患者本人の意思決定を尊重し切れない場面に遭遇したこともあった。元々、Concierge Medicineに関心があったことに加えて、医療代理人制度について理解を深めて、患者の意思決定を支援したいという想いから、私は臨床医ではなく、医師資格を持つ法曹の道を目指すことにした。その後も様々なご縁があって、現在は1年目の弁護士として、先輩方の指導を受けながらも臨床現場で対応に苦慮される法的・倫理的問題や新たなヘルスケアサービスの法的課題について検討を重ねる日々である。ずっと希望していたら、最近になって、日本では数少ないConcierge Doctorに出会うこともできた。

Concierge Medicineの実現に近づいているのか、そうではないのか分からない。それでも、Dr. Jeremyに出会った9年前には想像もできないところまで辿り着いたわけなので、過去や資格に捉われず、理想を掲げ続けて前へ進んでいきたいと思う。